
僕は君に恋をした（仮）

佐竹 律

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は君に恋をした（仮）

【Nコード】

N9630V

【作者名】

佐竹 律

【あらすじ】

これは僕の話。

これは僕の「特別」の話。

これは純粋な気持ちを持ち続けたいと願った子どものような僕の話。

これは冷静なままでいようと決めた大人ぶった僕の話。

これは君の特別になりたいと望んでしまった僕の話。

始まりの前（前書き）

これは恋愛メインの話です。しかし、異性、同性に差を付けるつもりがないので、B L、G Lの部分が出てくるかもしれません。苦手な方は読まないことをお勧めします。

始まりの前

思うだけで良い。思われたいと望んだ瞬間、全てが汚くなるから。
だから、僕は――

「理人さんあやとって大人ですよね」

「大人と言っても君と二つしか変わらないよ」

新聞から目を上げ、隣で肩にもたれかかって座る女の子を見て苦笑交じりにそう言った。そして、控えめな茶髪の頭をなでた。彼女が頭を撫でられるのが好きだと言っているのでそうしていたら、いつの間にかその動作が癖になっていた。

「綾、今日は泊まって行くの？」

「ううん、これからゼミのメンバーで飲み会があるから」

「そう、わかった」

そして、また新聞に目を落とした。すると、隣で綾がくすりと笑った。何？ と言えば、何でもないと言う。だけどね、とため息に似た息をつく。

「やっぱり理人さんは大人ですよ。元カレだったら嫉妬して大変だったのに……女の子だけの飲み会だよって言っても信じてくれなくて、機嫌悪くして、いろいろ面倒くさかった」

綾の元カレ話はいつものことから、簡単に相槌だけ打っておく。綾は安心しきって無防備にすりよってきた。まるで猫のようだと思う。でも、綾が不用意な子だからそうしているわけではない。女子高上がりのお嬢様だが、大学に入学して二年とちょっとでいろいろ経験して学んだらしく、その辺りはしっかりしている。綾はその経験からわかっているのだ、僕が、彼女に手を出さないことを、特に何も求めないことを、だから、いろいろ経験して疲れた彼女は、僕を彼氏に選んだ。綾の彼氏になって三ヶ月になる。綾は過去二番目

の長さだと笑って教えてくれた。

「そろそろ行くね」

綾はテーブルの上に置いていたメガネを取り立ち上がった。

綾はメガネが似合う。かけていなくても可愛いのだが、メガネをしていると大人しいおっとりした顔立ちに見え、また違った可愛さがあるのだ。その見た目のせいかよく男に声をかけられると言う。そして、意外にきっぱりと断ることに、声をかけてくる男も、彼女のことをよく知らない友人も驚くのだと言う。その時の目を丸くした顔を見るのは少し小気味良いよとふつくらとした唇が弧を描く。その笑顔が彼女をよく表していると思う。真面目で優等生な部分も有りながら、小悪魔のように人をからかう、だけど、自分が心休まる場所が一つは必要な寂しがり屋。それが堪らない男は少なくとも同じキャンパスには多いようで、彼女は恋人に不足はしなかった。

僕も立ち上がって彼女を玄関まで見送りに出る、と言っても六畳間の部屋からブラインドを上げれば、そこはすぐに玄関だ。学生の借りている部屋などそれくらいの広さで十分だ。部屋からでも見送ることは出来るが、立ち上がってブーツに手間取る彼女にドアを開けた。綾は靴のつま先をトントンと鳴らして僕を見上げた。

「ありがとう」

「どういたしまして。今度はいつ来る？」

三日に一度のペースで綾は僕の部屋に遊びに来るので、一応帰る時に訊いておく。綾はそうだなあとしばし考え込んでから、気分が向いたらと舌を出した。

「でも、飲んだ次の日は理人さんのお味噌汁が恋しくなるから明日も来ちゃうかも」

「あんなので良ければいつでも作るよ。ついでに卵焼きとほうれん草のお浸しも付けようか」

「わーい、料理上手な男性って素敵」

綾は諸手を挙げて喜んだ。そういう可愛さは計算の無い無自覚によるものだ。微笑ましくてつい笑みが零れる。

「それくらいで大げさな」

「いえいえ、貴重ですよ。今までの彼氏は料理らしい料理なんてしなかったですから」

綾は元カレへの文句も忘れず、少しおどけながら「じゃあ、たぶんまた明日」と手を振って部屋を出て行った。僕は階段を下りて行く綾の姿が見えなくなるまでドアから顔を出して、それからドアを閉めて部屋に戻った。

綾が心休まる場所は、現在のところ、僕の部屋だった。そのことに僕は悪い気はしなかった。

なぜなら、綾は可愛かった。そして、僕は「妹」のような彼女が好きだった。

カノジョとカレシになったワケ

綾とは大学のサークルで知り合った。僕は法学部の四年生で、彼女は文学部の三年生だった。それぞれの棟が離れていることもあってそれ以外で会うことはほとんどなかった。

特にサークルに入ってなかった僕に声がかかったのは去年のことだ。同じ学部で知り合った友人からテニスサークルに誘われたのだ。テニスに興味はなかったが、テニスサークルは名目だけで、ほとんどは飲み会をしたり、旅行に行ったりとイベントごとがほとんどであり、つまりは男女の出会いが目的のサークルということだった。男が少ないから男女比を合わせるために名前だけで良いから貸して欲しいと頼まれた。どうも彼も先輩命令によりメンバーを探していて、何のサークルにも入っていない僕に目を付けたようだ。それに加えて彼曰く、「お前、それなりに女の子にもてるじゃん」とのことだった。それは置いて、彼があまりにも必死なので、了承した。サークルの集まりも時たま顔は出すようにした。そこで綾と出会ったのだ。

僕は友人から理人を略してアヤと呼ばれることがある。そして、もちろん、綾は名前のまま呼ばれていて、時々、自分たちも周りも混同することがあった。

「紛らわしいですよー」

「ごめん」

そういった言葉を何度か交わした。紛らわしい原因は男なのにアヤと呼ばれている自分にある。謝る度に綾は、いえいえ気にしてませんからと少し間延びした話し方できやらきやらと笑った。それは彼女の特に親密ではない相手への一貫したキャラクターだと知ったのは、彼女を含めたサークルメンバーの何人かと遊びに行った時のことだった。解散したのは日付が変わる少し前。帰りが同じ方向だったので、いっしょに駅まで歩いていたら最初に初めて彼女と会話した

い会話をした。

「ずっとにこにこしてると頼ひきつりますよね」

そう言つて隣を歩いていたら綾が突然パンパンと頬を叩いた。

「そうだね」

「でも、理人さんは自然ですよ、笑顔」

「もともとそういう顔なんだ。よくへらへらするなと言われた」

男なんだからもつと締まりのある顔をしろと親に度々言われてきたのを思い出した。一人暮らしを始めてからはめったに顔を合わせないので最近では言われていない。だが、それはこの歳になっても直らないことに親が諦めてしまっているのも理由かもしれないかった。

「女の子には羨ましいですよ、それ。私、やりすぎてるのかちやらちやらした女に見られて、そういう男性ばかり寄つて来るんですよ」

理人さんもそう思つてたでしょと僕の顔を覗きこむ。

「少し」

「やっぱり」

正直に答えた僕に綾はため息をついた。

「でも、サークルの女の子は皆そんな感じだと思う。君だけが特別そうってことはない」

そこで綾がくすつと笑った。僕が不思議に思っていると、

「君って今時言わない」

「あ、ごめん、僕、時々堅い日本語使っみたいで」

「それ。僕って言うのも」

「あ……」

ばつが悪く頭をかいだ。留学後、英語に慣れてしまったせい、簡単な文章などは英文を訳すような言い回しになつてしまうことがあつた。帰国してすぐはそれをよくからかわれたものだった。

「良いんじゃないですか？ 文学的で私は好きですよ」

「ありがとう」

「言葉遣いもそうだけど、理人さんって他の人とちよつと違います

よね」

「どこが？」

「うーん、女の子にがつがつしてないというか、雰囲気が落ち着いてるというか」

「今はやりの草食系男子ってやつじゃないかな」

その言葉はよく使った。なんとなく違和感があったが、そう言っておけば、だいたいの場はしのげたのだ。だが、綾はかぶりを振った。

「それもなんだか違う。なんというか、サークルの子は眼中にないというか、興味がないうか……だからね、私の周りで理人さん狙ってる子多いんですけど、止めといた方が良いつて言ってるんです。彼氏とラブライブイチャイチャつて言うのに憧れてる子ばかりだから、あのサークル」

僕は少し目を丸くした。自分を狙っている子がいるというのは友人からちらりと耳にしたことがあったから、それは驚くことではなかった。美形とまではいかないが、かつこいいと言われることはあったし、服装も顔の雰囲気にあつたようなシックなものを着ているせいか、そういうのが好みの子には恋愛対象に見られるのだ。

僕が驚いたのは、恋愛目的の女の子を綾が客観的に静観していることだった。

「君は違うの？」

「うーん……そういうのは一年で卒業したかなー、同い年の人と何人か付き合ったけど、やっぱり男子も典型的な恋愛というか、恋人らしい恋人を求めてて、それが何だか疲れちゃって。今は年上の人と付き合ってるんですけど、年上は年上で、面倒くさいことも多いし、何だか冷めてきちゃいました」

軽い調子で綾は言った。

そこで飲み屋が連なる通りに出たせいかながいきなり多くなった。それも酔っ払いばかりで、仕事終わりで飲んでいたサラリーマンやら、大学生と思われる集団やら、体を密着させて歩く男女やら、も

みくちやにされた。はぐれないように綾の肩を抱いて引き寄せる。

喧騒の中で綾が何か言った。聞きとれなくて、え？ と聞き直した

僕に綾は少し声を大きくした。

「紳士ですね」

「普通じゃない？」

綾が聞き取れないことを危惧して僕もさっきより声を大きめに言
った。

「だって普通に触れてくるのにいやらしくない」

「あー、それはアメリカに行つてたからじゃないかな」

何も考えず、女性を先に通したりすると、さすがアメリカ帰りと言
われることがあるのだ。こう考えると、からかわれることが多い
性分なのかもしれない。だから、綾も面白がつているのだろうかと思
つたが、僕自身特に気にしてもいなかった。

「違うと思うな」

そこに予想外の返答が返つて来て、僕は肩口にある頭を見下ろし
た。綾は僕を見上げて笑った。あとから考えれば、男の腕の中にい
るのにそれは余裕たつぷりの無邪気な笑顔だった。

「理人さんだからですよ」

「……それは、どう受け取っておけば良いのかな。喜ぶべき？ 悲
しむべき？」

少し間を置いて僕は尋ねた。

「男性としては悲しむべきかもしれませんね。……そして、私も女
として悲しむべきかも」

綾が付けたしたことの意味を図りかねて僕は首を傾げた。だけど、
綾はそれ以上何も言わなかった。

「——理人さん、私と付き合いませんか」

そう綾が先程と同じように少し叫ぶように言ってきたのは少し
経ってからだった。まだ人は多くて、少し声を大きくしただけでは
人混みの賑わいにすぐに紛れてしまう。少し道を外れようかと考え
て周りを見回していた僕も至近距離だと言つのに、うっかりスルー

してしまいそうだった。

「え、何？」

間抜け面を向けた僕に、綾は背伸びして僕の耳元で言った。

「私ね、もう少しいろんな人と付き合ってみるんで、でも、それでも、駄目だったら、理人さん、私と付き合ってください」

「……冗談？」

「本気です」

思わず聞き返した僕に綾は本当に真面目な顔で言った。僕は少し唸ってから、「考えておくよ」と言った。

綾に再度「付き合ってください」と言われたのは、学年が変わって少し経った頃、綾が当時付き合っていた社会人の男性と別れたすぐあとのことだった。それはサークルの飲み会の場で、綾はわざわざ僕の座っているところまで来て言ったのだ。彼女としては、今後言いられることがないように人前を選んで言ったのだろうが、その度胸は感服すべきと言える。皆が驚く中、ビールを飲みかけていた僕は、口に含んだ分を飲み下すと、「いいよ」と応えた。そのまま何と言うこともなく枝豆に手を伸ばすと、綾は枝豆の皿を取って笑顔で僕に差し出した。そうして、僕たちはサークル公認のカップルになった。

どうして綾と付き合い始めることになったのかと訊かれたとき、そのまま経緯を説明すると、何だ、その自己中とは訊いてきた相手の方が憤慨していた。どうして、そんな女と付き合うことをOKしたんだよと訊かれて、僕は、「僕のことを理解しているから」と答えた。そして、当然のごとく変な奴と言われた。

予感

「お前さ、女の子に興味ないって噂たってるぞ」

「は？」

手元の文庫本から顔を上げ、隣を見た。発言した当の本人は何事もなかったように自分の持つ漫画を読み進める。待ってみるが、読み終えるまで話の続きをしないつもりらしい。こういう気まぐれはいつものことなので、僕はふーと息を吐いて空を見上げた。同時にパリリとページをめくる音がする。傍から見れば男二人が並んでベンチで読書とは奇妙な光景に違いない。

ここは図書館の裏側で、芝生とちよつとした花壇とベンチがある。数日続いた雨は今朝がた上がり、まだ地面は湿っているが、今、僕たちが座っているベンチは大きな木の枝が覆いかぶさるようになっていたため、濡れてはいなかった。そこで僕が本を読み始めてから十分もしないうちに杉本がやって来て隣に座ると漫画を読み始め、今の状態になっている。しかし、それは僕たちには普通のことだった。僕たちは似たような趣向があり、誰もいない場所で、風を感じて本を読むというのもその一つだった。今も雨上がりの水の匂いを含んだ涼しい風が緩やかに流れている。空は青の水彩絵の具を水で薄めて刷いたような色だった。

しばらくぼんやりしていると読み終えたのかパタンと杉本は漫画を閉じた。

「で、どうなの？」

「何が？」

空を見上げながら応える。空の色が透けるような薄い雲が流れて行く。杉本も同じように空を見上げたのが気配で分かった。

「お前さ、彼女とやってもなければ、キスもしてないって噂だけど、ほんと？」

杉本の問いはいつも簡潔だ。

「それ、どこからの噂？」

「んー、俺の彼女」

そこで、杉本の彼女も文学部で、綾と同じゼミだということを思い出した。

「綾が言っただ？」

「知らね」

「……してないよ」

綾の名誉のためにここはしたと言っべきなのだろうかと思ったが、杉本に嘘を言っても仕方ないような気がしてそう言った。すると、予想通り、ふーん、そうなんだと自分から訊いてきたというのに、興味なさげに杉本は呟いた。

「で、お前は女の子に興味ないと」

「綾がしたいなら僕は構わない」

「それ、女の子から言えねえだろ」

杉本は呆れたように言った。

「言わなくても雰囲気でしたいかしたくないくらいわかる」

少しだけ間があった。会話の代わりに木に止まっているらしい雀のさえずりと遠くから聞こえる車のエンジン音が常に聞こえていて、一回だけ窓を開ける音がした。その後には杉本がため息を吐いたので、僕は杉本を見た。

「お前、抜けてるように見えて、そういうの敏感だから、そうなんだろうな」

杉本は一度も染めたことがない真っ黒な髪をかきむしった。黒ぶちのメガネを取って手の中で弄ぶ。黒いシャツに黒っぽいジーンズ、いつも真っ黒な服装をしているが、今日も例外ではなかった。

「お前も変なら、お前の彼女も変だな」

「否定はしないよ」

杉本はシャツの裾でレンズを拭き、メガネをかけ直すと僕を見た。

「でさ」

「うん？」

「お前ってホモなのか？」

何の前触れもなかったため、いや、杉本に前触れというものを求めること自体難しいことではあるのだが、僕は少しの間だけ固まった。だが、それは杉本が取った間よりは短かったと思う。少なくとも、その間に窓に近づき、開閉する人間はいなかった。

「……確実に言えることは」

「うん」

杉本は真面目くさって頷いた。

「君とキスをしたいとは思わないかな」

「それ以上は？」

「それ以上も」

「なら、いいや」

杉本はベンチの背もたれに寄りかかった。質問の意図が理解できずにジト目で僕は杉本を見た。

「何が良いのかよくわからないんだけど」

「いや、俺の彼女がそういう目で見てくるから」

「誰を？」

「お前を」

「どんな風に？」

「恋敵として」

「なるほど」

ひどく淡々とした受け答え。だから、常識から逸脱した内容であると本人たちも忘れそうになる。

僕たちは一応、通常の社会通念は弁えているつもりだ。だから、こんな会話、お互いに他の人とはしない。それが互いを親友と認識しているゆえんだ。僕は杉本は僕の親友だと答えるし、杉本も僕を親友だと答える。同じ学年で同じ学部、杉本は一浪しているから、一年遅れて入学した僕と同じ年でもある。そんな僕たちは大学で知り合ってからそういう間柄だ。だから、この大学に入学して、僕の一番の理解者は杉本と言っても過言ではないかもしれない。ただ――

「君の彼女はそういう視点を持っているわけだ」

「あいつだけでもないと思うけどな、腐女子」

杉本は立ち上がって伸びをした。

「腐女子？」

「男を見たら、そういう仲だと思っ人種のこと。お前も気を付けろよー、ネタにされやすそうだからな」

じゃあなと手を振ると、杉本はベンチの並ぶ小道を横切り、柵を跨いで芝生の上を歩いていく。

「見つかったら怒られるぞ」

「ここ突っ切った方が近道なんだよ」

サクサクサク。

僕より五センチ高い背中が小さくなるにつれて芝を踏む音も遠ざかって行く。

杉本は僕のことを変わっていると言うが、杉本自身も人のことを言えない。こういうのをどんぐりの背比べと言うのだろう。だけど、杉本は僕なんかよりよっぽど優秀だった。僕のように感覚でものを言うわけではなく、考えは機械のように論理的だ。興味のあることに関して情報の収集を怠らず、僕も一応、広い意味での彼の興味の範囲に含まれていて——だから、親友などできているのだが——それでいて、杉本は勘も鋭かった。だからこそ、杉本は僕のことを誰よりもよく知っていて、理解もしてくれている。

そう、大学に入学した「後」の僕のことを。

腕時計に視線を落とした。

「まだ時間あるな」

一人呟いて手元の文庫本を完全に閉じてしまうと、目を閉じ、しばらく僕はそのまま風を感じて座っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9630v/>

僕は君に恋をした（仮）

2011年8月26日03時33分発行